

風音員(2) テレビジョン雑感

新井 俊郎

音楽と風景と文字だけでテレビジョン世界の極致を表現しているのが、NHK教育番組の「名曲アルバム」である。余程のことがないかぎり、テレビジョンには喋る人物を出すべきでない、という事がよく分る番組である。

テレビジョンの本質は、見事な映像を創り出した映像自身に語らせるところにある。怪しげな人物を次から次へと並べかえて怪しげな言辞を弄させることではない。ついでに言えば、税金のような格好で視聴料を強奪しているNHKは、「紅白歌合戦」のような民放ででききる番組を組むべきではない。相撲や野球の放送で、「制限時間です。立ちました!」とか、「打ちました。打ちました。ああ、ホームランです!」などと言って欲しくない。見ている方には分るんだから。

何時だったか、黒沢明さんと北野武さんの対談をテレビジョンで観た。両監督はいたって物静かに、映画を語った。

「貴方の作品はお喋りが無くていい。私は昔から貴方の作品は観て来ましたよ」黒澤監督が言う。

「はい、恐縮です。世の中お喋りが多すぎますから」北野監督は緊張気味に答えた。

「ハハハ...、そうだそうだ」

「お笑いの方でも、なるべく自分が喋らないようにしています」

「うん、それが本当ですよ」

北野武という人は、戦後民主主義の教育を受けた人である。しかし、大江健三郎とは違う。ましてや、青島幸男や大橋巨泉や島田伸助などとは全然違う人種である。彼は若くして、父親から勘当された。この時期に猛烈な勉強をしたに違いない。哲学の本や文学の本をむさぼり読んでいる。ピンと来たのは、「ビートたけし・きよし」コンビの漫才をテレビジョンで見たときである。只者じゃあないなと思った。一緒に見ていた当時小学校5年生の息子と細君に、「この、たけしと言う人物を忘れるな。いまに、きっと頭角をあらわすよ」と言った。もう40年も昔の話である。顔と言葉に片鱗があった。

私は彼の本をほとんど読んでいない。読んだのは『裸の王様』『午前3時25分』『ザ・知的漫才 結局わかりませんでした』の3冊だけである。この3冊を読んだだけでも、彼が単なる戦後派でないことが分る。行動の根底には大正デモクラシーの流れを汲む哲学がある。文学がある。いままた、池田晶子や福田和也を読んでいるにちがいない。一本の樹は枝葉根幹から成っているが、根幹に沈潜して、思い考えるのが哲学だとすれば、枝葉のみにかかずらって、ざわざわがやがや喧伝するテレビジョンには、一片の哲学も無い。あぶない、あぶない。

(2004-7-26)